



コンビニのおにぎりから学んだ思いやり



国籍	ミャンマー
職種	電子機器組立て
実習実施者	パーソルファクトリー パートナーズ株式会社
監理団体	ジェーオービー協 同組合

ニン スライン
HNIN SU HLAING

たかがおにぎりされどおにぎり技能実習生として大阪の電気製品の工場で働き始めて、初めての冬に私はこの言葉の意味を知った。私の仕事は8時半始業だ。昼シフトと夜シフトがあって、今週は夜勤。夜8時半から朝の5時まで、工場で小さな電子部品を組み立てている。自分で電気製品を作っているのに、自分で買うのはまだ夢の話。休憩室で一人、持ってきた水を飲むのが日課だった。ある夜、急な残業で終電を逃した。朝7時に仕事が終わって、寮まで歩いて20分。2月の大阪は骨まで凍る寒さだった。震えながらコンビニに入り、財布の500円を握りしめた。温かいものを食べたくて、一番安い100円の昆布おにぎりを一つだけ買った。レジの店員さんは、私の青い作業着と、袖から見える軍手の跡を見た。電気の工場？夜勤お疲れさま。8時半から大変だったねと言って、ホット用の袋丁寧に入れてくれた。「お金はいいよ。夜勤明けは体が冷えるから。ゆっくり温まって」私は下を向いたまま「ありがとう」しか言えなかった。技能実習生は「安い労働力」だとニュースで聞いたことがある。でも、この人は私のシフトも、8時半から始まる大変さも、全

部知っていてくれた。「お客さん」じゃなく、「夜通し日本の製品を支えてくれた一人間」として見てくれた。それから私は、自分が工場で作る小さな基盤への気持ちが変わった。昼シフトの仲間も、夜シフトの私も、眠い目をこすりながら一つチェックしている。この小さな部品が、誰かの家のエアコンになる。誰かの病院の機械になる。顔は見えなくても、使う人が寒くないように、困らないように。夜勤明けに食べたあの100円のおにぎりは、コンビニの電気で温められたんじゃない。店員さんの「お疲れさま」という言葉で温められたんだ。日本語の「お疲れさま」は、家族じゃない人に「あなたの頑張りを私は見てたよ」と伝える魔法だ。ミャンマーの母は言う「人が夜中に起きて作った物には、祈りが入っていた。技能実習生は3年で国に帰る。でも日本で貰ったこの「思いやり」を、ミャンマーに持って帰りたい。私もいつか工場を持って、夜勤明けの従業員に「お疲れさま」と温かいスープを渡す社長になりたい。たった100円のおにぎりが、電気工場で働く私に教えてくれた。思いやりとは、シフトも国籍も関係ない。8時半から頑張る人、夜通し頑張る人の冷えた手に、気づいてあげられる心だ、このおにぎりの温かさを、今度は私から世界に届ける番だ。